

まっすぐに新安鎮駅近くの鉄橋が爆破され、旅団命令で救援に出動、はげしい戦闘となり、歩兵砲小隊長はじめ五人ほどの戦死者と、十数人の負傷者が出る大変な戦いでした。

奥地の引揚者もだいぶ少なくなったころ、我々の武装解除がおこなわれましたが、その日の夜、国府軍は八路軍に全部没収されてしまい、三晩ほど連夜、敵の夜襲にあいみじめでしたが、国府軍の希望で、再度武装、武器を渡され平穩がもどりました。

我々は四月、最終引揚船で連雲港をあとにして帰路に着きました。

中国戦場での悪夢

静岡県 伊藤 万司

北支派遣軍の最前線「洛陽」城外に駐屯の「驚三九一七部隊（第百十師団）」通信小隊長として第十二軍の「老河口作戦」に基づいて「西峡口防戦作戦」に出動したの

は、春まだ浅い昭和二十年三月初旬であった。一望千里の麦畑の青い芽はまだ土の中に眠っていた。部隊長は「帯包少佐」である。

一路「西峡口」へと前進中のある夜、二キロほど先にある部落の偵察を命ぜられ、部下五人とともに騎馬で、麦畑のなかを進んだ。月の光がいやに明るい、麦畑には一切の遮障物はなかった。遠く部落が月の光を浴びて黒く浮かんでみえる。部落に近づくとつれて緊張が増した。

二、三百メートルに近づいたころだったろう。パ、パ、パと五、六発の銃声とともに弾がピュッと耳もとをかすめた。至近弾だ。「逃げる」とどなってくつわをかえした。偵察が任務である。三十六計を決めたが、耳もとをかすめる音が近いなと思った瞬間、馬もろともたおれこんだ。左足が馬の下敷きになったまま身動きができない。なにしろ馬の体重は四百キロ近くもあるのだ。馬は頭を持ち上げてみてもがくのみであった。相変わらずの銃声である。

「ここで襲撃されたらおわりだ」

一瞬死の恐怖が頭のなかを通り過ぎた。

やがて銃声もやみ、もとの静寂にもどった。月の光だけがいやにまぶしく輝いていた。

私の倒れたことを知って部下がすぐ引き返してきて、皆でやっと馬を立たせたが、右前あしをうたれたらしく地にあしはついていなかった。三本あしである。私も立ち上がったがその場にまた倒れた。左あし首に激痛が走った。一步も動けなかったが出血はない。馬もろともたおれたときに左あしが馬の下じきになったためだろうと思つたが骨折かねんざかはわからなかった。部下の馬に二人乗りして、三本あしの軍馬をひきながらやっとの思いで部隊に辿り着いた。

軍医の診断によりねんざとわかったが、はれて靴もはけず、あしはまったく地につかなかつた。その後約一月は一人で馬に乗ることも出来ず、軍刀を杖にして作戦はずいぶんと苦勞をした。

この日、昭和二十年三月三十一日、満月の夜であつた。いつまでも忘れることは出来ないだろう。なぜならこの日は私の誕生日であるからである。馬が身代わりになつ

て九死に一生をえた最初の苦い思い出は、今でも鮮明に記憶に残っている。

作戦中の四月末、部隊の人事異動があつた。部隊長の帯包少佐は師団副官として転出、あらたに師団参謀の尾崎大尉（陸士五十四期）が部隊長として着任し、また第四中隊長の北尾中尉も転出し、紀本中尉が中隊長となつた。同時に私も本部づきを解かれ、第四中隊の第一小隊長を命じられた。そのころにはだいたいぶあしのねんざもなくなり、一人前の乗馬も出来るようになっていた。

昭和二十年六月のある日、一度目の危機がおとづれた。駄馬で行軍中をP51三機に襲撃され、超低空で交互の機銃掃射である。馬も身もしゃへいする場所はまったくなく撃たれるままである。それでもせまい道路の側溝にへばりついていた。南京で銃撃された時には、煉瓦造りの兵舎があつたが、ここでは一望千里の麦畑と、小さな柳の木が点々とあるのみである。

やがて敵機は去つたが、友軍の犠牲は大きかつた。二十数頭の馬は敵機の餌食となり、隣に伏せていた戦友は背中から貫通され、再び立ちあがることは出来なかつ

た。当時の制空権は完全に敵にあり、以降の行動は夜間に切りかえられた。

そして三度目の危機が訪れたのは、状況の悪い敵地をさらに前進中の七月のある夜のことであった。地雷の爆破とともにこだかい丘のうえからの一斉射撃を受けた。

我が兵力約三十人、いつ襲撃を受けてもおかしくない状況のなかで、すばやく道路の側溝に身をふせて応戦した。二・三百メートルの距離しかないだろう、敵の聲が間近に聞こえるほどである。突撃してくるのだろうか時々「ワァーッ」と喚声が聞こえ、手榴弾がさく裂するがまた引き返してゆく。

いよいよ白兵戦なのか、兵はすでに着剣していた。私も軍刀を抜き拳銃をだして撃ちまくったが、最後の一発は自決のため残しておこうと、すこしばかりの心の余裕があった。

「私の人生もここで終わりか」

一瞬故郷のことが、家のことが頭をかすめたが不思議に恐怖心はなく、へんな落ち着きがあった。突撃してくると思った敵も、百メートルぐらいのところまでくると手

榴弾をなげては引きかえした。こんなことが三・四回繰り返された。

どのぐらいの時間がたったことだろう、ずいぶんと長時間に思えたが、実際には十分前後の戦闘だろう。銃声もまったくだえ、闇の静寂だけが残った。緊張感も抜けた我々はしばし無言のままであった。敵の兵力は十数人のゲリラだろう、やはり人の子、白兵戦は恐ろしかったのだろう。我々も同じ思いであったが、彼らの勢力の差を知って早々に引き揚げたようだ。この時の戦闘により、尖兵に立った三人が地雷により爆死、銃撃により一人が負傷した。戦死された方々のご冥福を心よりお祈りしたい。

そして昭和二十年の八月二十日ごろだったろうか、停戦協定が結ばれたため戦闘中止、駐屯地「洛陽」へもどれとの命令を受けて喜んだ。ひとまず戦闘は終わったのだと、下級将校の私達にはそれだけの情報しかえられなかった。そして一か月あまりの行軍のすえ、留守部隊のいる「洛陽」にもどってはじめて敗戦を知った。

留守部隊では、銃の菊のご紋章は全部けずりとられ人

心はまことに不安な日々であった。しかしやがて落着きを取りもどし、平穩な捕虜生活を送ることが出来た。北関東出身者が多く、故郷を偲んでは民謡を歌い、だしものはいつも「暎の母」であり、「八木節」であった。

昭和二十一年三月、待ちに待った復員命令が来た。日本陸軍士官学校出身の蔣介石総統と何応欣將軍のきわめて人道的配慮から、在中国の陸軍は敗戦後もなんらの労役もなく、比較的早く帰国出来たことを忘れてはなるまい。

「洛陽」から無蓋貨車で数日をへて「上海」に到着、復員業務をおえ米国の輸送船に乗せられて中国をあとしした。やっと内地に帰れる、生きて帰れる。魚雷の心配もなかった。

二・三日の船旅だったろうか、内地の山々がみえはじめた。みんな甲板に出て涙を流しながら喜びあった。そして夢にまでみた日本の土地「博多」に上陸したのは昭和二十一年四月四日であった。

以上中国戦場でのごく一部を記録したが、戦争に明け暮れた青春の日々を懐かしむことと、戦争そのものとは

別問題である。戦争のあの悲惨さを知りつくした者こそが、最も戦争を嫌悪し、平和を願っている。

「親が死に、子が死に、孫が死ぬ」戦争は根底からこれをつくがえすものである。戦争のない恒久的な真の平和を願い、第二次世界大戦に倒れた多くの戦友のご冥福を心から祈るものである。

針の山

新潟県 金子富栄

馬といえば現在は競馬、乗馬クラブ、映画やテレビの撮影用としてしか用途が考えられないが、昔は労役、交通輸送用として、人間生活に欠くことの出来ない重要な存在であった。とくに軍隊にあっては、兵隊よりも尊重されたものである。

「お前たちは一銭五厘でなんにんでもひっぱってこられるが、馬はなん百円という大金がいるんだ」

と耳にたこの出来るほど聞かされた。事実、当時の軍